

# TVドラマ『どてらい男』と 通商国家・英国の共通項



木村 正人  
在英国際ジャーナリスト

新型コロナウイルス変異株の猛威で、英国は新年早々、3度目のロックダウン（都市封鎖）に追い込まれた。59歳になった筆者は2月中旬、英オックスフォード大学と英製薬大手アストラゼネカが共同開発したワクチンの1回目接種を終え、ここまで来て感染すると元も子もないため“穴熊”生活に入った。

社会の動きもびったり止まり、ニュースもべた凧（なぎ）状態。そこで大阪の機械工具問屋街、立売堀（いたちぼり）を舞台にした商人（あきんど）、山下猛造（もうぞう）が大活躍するドラマ『どてらい男（やつ）』（関西テレビ、1973～77年）をストーリーミングサービスで視聴することにした。

庄屋から没落した福井の貧農に生まれた「モーヤン（主人公の愛称）」が立売堀に丁稚奉公に出て、主人や番頭の執拗な嫌がらせを跳ね返して自分の店を持ち、成長していく物語。9歳から家業の食料スーパーで丁稚同然に働かされていた筆者にとっては思い出深い作品である。

筆者の父も「モーヤン」と同じように田舎の小学校を出て丁稚奉公に出、先の大戦で通信兵として出征、終戦とともに外地から復員した。はちみつの闇取引で警察にしょっぴかれたこともあったそうだ。その後、独立して大阪・西成の商店街に「ママの店」という小さな食料スーパーを出した。

今から50年近く前、1日の売上げが30万円を超える日もあり、年の瀬は深夜12時まで営業し、日販が300万円を突破したこともある。売上げを鮮明に覚えているのは、レジと値札打ち、閉店後の勘定が筆者の日常業務だったからだ。レジの記録と勘定が1円でも合わない目から火が出るぐらい父に殴られた。

おかげでやたら算数と数学に強くなり、天高や京大、米コロンビア大で学ぶことができた。父は釣りや博打、PTA活動の道楽をするようになり、大型スーパーという時代の波を読み切れなかった。休みなしで働かされた母は脳卒中を起こし、死ぬまで25年間、不自由な生活を送る羽目になった。店はもちろん閉めた。

近所には商店街や市場がいくつもあったが、今では

駐車場やシャッター街に変わり果てた。実家の店（敷地面積約70m<sup>2</sup>）を相続した姉が最近、処分した値段を聞いて涙がこぼれた。100万円の値段しかつかなかったというのだ。1日300万円以上を売り上げ、難波まで地下鉄で10分という便利な土地が……と愕然とした。

時代の流れを読み誤ると地獄を見る。「不動産は上がり続ける」と信じ切っていた父は1990年代の金融バブル崩壊にも直撃された。『どてらい男』を観ながら、考えに考えた。欧州連合（EU）離脱とコロナ危機という大津波を読み誤れば、英国で暮らす私も多くを失うかもしれない。

「英国は生き延びるのか、それとも死ぬのか」

変数が多すぎてギャンブルの予想に近い戯言かもしれないが、英国が生き残るほうに賭けようという思いを強くした。その理由は英国が商いをしなければ生きていけない海洋国家、「モーヤン」のような通商国家だからだ。この国には金儲けに生きがいを感じて起業する若者が日本に比べ圧倒的に多い。

英国人にはまず「毎度おおきに」の心がある。仮に日本人に何か資料を送ってあげたとする。日本人は頼むときは丁寧だが、資料を手にしたとたん音沙汰なしの人が多。英国人は「毎度おおきに」とばかりにすぐにサンクスメールを送り返してくる。これこそ、次につながる「モーヤン」精神だ。

筆者は英国に来て14年になるが、取材の約束を破られたことが一度もない。列に横入りされたこともない。英米の「特別な関係」を見ても、血を流してでも同盟を守る。貿易でも外交でも信用や信頼が一番大事なことを知っている。ひと昔前まで日本人は英国人以上に律儀だったが、今は心許ない。

ナポレオン戦争と第2次大戦の後、英国は国内総生産（GDP）比でそれぞれ250%前後の政府債務を抱えた。前者は産業革命と植民地拡大による経済成長で解消し、後者は激しい通貨切り下げとインフレ、儉約で何とか乗り切った。借金を踏み倒さないということも英国の大きな信用になっている。

英国人の長所は観察して分析しうまく解説できることだ。ゴルフ取材で出会った少年も、英国人の友人も、欧州大陸で出会った英国人もこちらが驚くほどわかりやすく物事を説明した。叱られ、怒鳴られ、殴られて育った日本人と、話して聞かされ議論して育った英国人との間には埋め切れない差がある。英国人はどんなときもカッとならず状況を観察し分析している。

困ったときに必ず助けてくれるのも英国人だ。妻が乳がんを患って途方に暮れているときに救ってくれたのは原則無償で医療サービスを提供するNHS（国民医療サービス）。長年務めた新聞社を辞めて独立したときも助けてくれたのは英国人の友人。今回のコロナ危機でもNHSは驚異的な組織力で夫婦ともどもワクチンを接種してくれた。

ワクチン接種が思うように進まないEUは一方向的に域内の外資系企業に輸出制限をかけ、英国に圧力をかけてきた。EUの発想はまさに「モーヤン」に嫌がらせを繰り返す「旦那さん」と「番頭・竹田」そのもの。嫌がらせをすればするほど自分の取り分が増えると考えている。通商国家・英国の発想は逆に「ウィン・ウィン」だ。

EUという巨大な「ぬいぐるみ」を着た小国の政治家や小役人が勘違いしているから、周囲がビックリするようなことを平気でやってのける。サプライチェーンを寸断するワクチンの輸出制限や、香港や新疆ウイグル自治区の人権問題に目をつぶり中国と投資協定で合意したのもその象徴だ。

歴史を振り返れば英国は常に欧州大陸の強烈な圧力にさらされてきた。ローマ帝国とローマ教会、スペインの無敵艦隊、フランスのナポレオン、第1次、第2次大戦を戦ったドイツ。そしてEUに別れを告げたとたん、英国はEUの結束を乱す「憎っくき敵」にされてしまった。

下手をすれば英国はEUに押しつぶされるかもしれない。しかし、これまで英国は欧州大陸から大きな「選択圧」がかかるたび、コロナウイルスのように変異して進化を遂げ、生き延びてきた。つまり、いろいろな知恵を絞り、策略を巡らし、産業革命を起こすなど進化して発展してきたのである。

英国のEU離脱には移民の流入を管理下に置き、対EUの貿易赤字を減らして国内雇用を回復させる狙いがある。EUが進む債務共通化への道は英国にはない選択肢だ。しかし金融サービス貿易の39%を占めるEUとの関係を損なうと英国経済は致命傷を負う。片やEUは英国を締め付ければ、人や資本が大陸側に移動すると考えているようにうかがえる。

データ保護の十分性認定について詳しい英ノッティンガム大学のマーティン・ヘネガン博士は筆者に「英国はEU単一市場の外で第三国として活動しているという現実と直面する。EUはこれから、個人データが英国に転送されるのを止めるのがはるかに簡単になる」と警告する。

日系自動車メーカーや自動車部品メーカーの関係者も「英国のEU離脱でコストがかかるようになり、英国で自動車を生産するメリットが薄くなった」と打ち明ける。英国の対EU貿易は輸出が36%、輸入が30%も減少するという予測もある。コロナ危機で昨年のGDPは9.9%も縮んだ。1709年の大寒波以来、最悪だ。

ピンチもピンチ、国家としての“生死”を分ける大ピンチだ。しかもEUはいついかなるときでも英国に対し“海上封鎖”を発動できる。進化できなければ英国は確実に終わりを迎える。しかし筆者はワクチンセンターで頭頂指揮をとる医師や接種を終えたお年寄りたちの目が輝いているのを見て、この国は死んでいないと思った。

世界大学ランキング20位以内に入る英国の大学でナノテクノロジーを研究する友人は「EUを離脱してもEUからの研究資金が止まるわけではない。これまで以上に優秀な人材が世界中からより多く集まるようになった。英国はEU離脱という選択圧によってすでに進化し始めている」と言う。

実際、コロナ危機でもワクチン開発や変異株の探知、治療方法の臨床試験で英国の科学は目覚ましい成果をあげている。

テクノロジー企業を支援するTech Nationのステイブ・ケリー議長は「英国のテクノロジー企業は昨年、前年より多い150億ドル超を調達し、フランスとドイツの合計額を上回った。世界をリードする大学、起業家支援税制、活気ある多文化社会、世界共通言語、法務や金融に通じた人材があるからだ」と解説する。

選択圧を受けるたび英国は進化を遂げてきた。「モーヤン」と同じように大失敗を繰り返しながら、困難に直面すると知恵を絞って生き延びるたくましいDNAが英国には宿っている。

筆者の実家のようにロンドンが二束三文に落ちぶれる姿はとても想像できない。ブレグジットとコロナ危機取材した筆者には「どん底の今こそ英国は買い」と感じられてならないのは身びいきにすぎないのだろうか。

(2021年2月18日記)

